

絵の国豊後——佐伯町

国 府 犀 東

二十年前、国木田独歩の遺跡を慕って佐伯の町に来た時、それは青葉と真菰まこもの町であった。死んだように静かな城下町だった。そこには玩具のように小さい汽船が乗る人も稀な客を待っており、河上には絶えず長閑ひづかな船歌が流れていた。

今度来て町の相貌そうぼうがまるで変わっているのに驚かされた。無論、鶴谷城も番匠川も昔のまゝに南海の陽ざしを浴びているが、その町その人の何という変わり方だろう。実にめまぐるしいばかりだ。実際我々は大分県を一巡して、この町に来た時、始めて活気に横溢おおいした町に来た気がしたのは、希望にあふれていることに驚いたからである。一体この変化は何によるのだろうか。僕はこの町を歩きながらしばしばこの疑問を頭の中に繰り返した。

佐伯附近は海産物に富んでいるばかりでなく、陸上の狩猟場としても古来有名だった。現に僕などもこの町の

附近で到る処獵人に出会ったが、どれもこれも相当な獲物を背負っている。中には大きな猪をかついで宗太郎峠を越えているのも見た。昔大友宗麟がこの地方で豪華な大巻狩を催したという記録など思い出される。

この町からは藤田茂吉、矢野龍溪などの明治の文人が出ている。国木田独歩はその青壮時代をこゝで過ごしたことは余りにも有名だ。独歩が此町に過ごしたのは僅か一年足らずだが、その間に彼はこゝの自然から深刻な印象を受けたらしい。「少年の死」「竹馬の友」など彼の珠玉の諸篇の中に佐伯特有の風物が描かれていることは、この町の人たちがかつての独歩の記憶を保存して町の年中行事に独歩忌を加えている。

「その日は何か他に催しがありますか。」

「別に大した事もいたしません、先生を慕う追憶談などしております。」

之は記念碑や句碑にもまさって町民の純朴さを語るものである。

「しかしこの町が最近活気づいて居る直接の原因は、何と言っても海軍のお蔭ですね。毎年六月になると連合艦隊が全部入って来て、こゝを基地として戦技訓練をします。海軍飛行場も完成した為です。」

「それこそこの町の大変な年中行事ですね。」

「そうです。そういう時期には全町挙げて軍港風景になるのですから盛んなものです。あらゆる施設が急速に発展しつゝあるのもそのためです。」

我々は初めて疑問が解けた。この町は番匠川が豊後水道に流れる川口、大きな三角州上にある。前面東北の海上には大入島が四字形の岸辺をもって、この町に対して自然の入江を形造っており、東南は遠く太平洋に開けている。

この究竟^{くわいきやう}の地形がかって漁港として、今また九州東辺の要津として南方作戦の根拠地たらしめたのである。

「二十年前と言えはまだ鉄道も通じてなかった頃だろう。」

同行の一人が言った。

「しかし一本の鉄道でこんなにも町の様相を変えるものだろうか。」

「それは随分変えますね。」と土地の人は言う。

「物資の乏しい処は別ですが、材木だの海産物だの、豊富な特産を有する佐伯では、鉄道開通と同時に急に種々の事業が起りましたから。」

「特に漁業法が急速に進歩した事も此の町を活気づけていますね。」

「以前は非常に原始的な方法で漁獲物も僅少でしたが、この頃は大規模な方法でやりますから、収入も非常に豊かになって居るのです。」

もっともこの地方の獲物の大部分は、沖合で阪神地方の仲買人が発動機船で海上で取引して直送するので、佐伯に陸上げされる分は、年間わづかに五十万円位に過ぎません。

それは複雑な海岸線に伴って到る処の曲浦、砂汀のたまもので、しかも地質的に火山岩に恵まれて居る為か奇削な岩石が思いもかけず海中に突出している光景に接することが多い。

「湾内に遊覧船でも設けるととても好いだろうが。」

そんな話も出たが僕はむしろ今のまゝに賛成だ。白帆の運ぶまゝに悠々と眺めていてこそ入江と曲浦の風趣が生きて来るからである。

大入島は町から一里足らずの海上に在る。周囲三里余の小島だが昔は名馬の産地として知られたそうだ。今は戸毎悉く漁家、小高い丘には甘藷島がつゞいている。この島の海浜波打際の岩石が一つの井戸にえぐられている。これは昔神武天皇東征の砌、こゝに船がかりし給うたが、海岸が皆岩石なので水が無い。帝みづから弓の末で岩の下を突き給うと清水がこんこんと湧き出したので将士みな渴を医したという伝説の井戸だ。この井戸は満潮の時は海水に没するが決して塩辛くないから不思議だ。言われるまゝに口に入れて見ると真水だ。余程湧出量が多いのだろう。近くに船繫石と呼ぶ二つの巨石が海中に突出している。之も神武帝の御船を繫ぎたまうたとの伝説がある。伝説と言えばこの附近を日向泊というのもやはり御東征に因むものらしい。現に佐賀関にも同名の地がある。何れも相当な根拠があるものと見るべきだ。

佐伯湾の南方畑の浦に伊勢本明神という小社があるがその御神体がすこぶる古い土器と言う。これも神武天

皇の御調度品だったと伝承されている。

大入島には大正天皇も御駐蹕遊ばされたこともあり、今なお山上に記念碑が建っている。当時はまだ皇太子だったが、この村の芋畑にお目を止め給うて「何か」と御下問があったので、ある老人が作つたいもを献上した。その老人は後その真相を聞いて恐懼感激、以来碑辺の清掃を一手に毎日箒をもって雑草一本生えぬよう努めているとか。

こゝから六七里沖の豊後水道中央の水の子灯台が見える。之は周囲僅か三丁余の岩礁上に築かれているが、その高塔は百八十尺、燭光六万八千八百八十、優に二十里外の海面を照らすという日本一の灯台である。

町の北に城山がある。之は昔毛利氏の居城鶴ヶ城のあった処で、その石塁は今も残つて居る。近年山上まで新道が開かれ、桜、楓の諸樹が植込まれ公園になっている。佐伯の美観はこの城山からの展望に尽きる。そこには番匠川辺の芦のそよぎを寄せて静かに流れて居り、下流葛港には幾十の漁船が豊漁の夢の中に眠っている。もしそれ東方に目を移せば碧海をたたえて大入島が指呼の中に在り、更に遠く漠々たる雲煙のうちに豊後水道のかな

た四国の山々を望むこともできる。郭内の天主閣跡には藩祖毛利高政を祀る毛利神社もある。

城山の麓に養賢寺という巨刹きょしつがある。之は禅宗妙心寺派の寺で久留米の梅林寺と並称される名刹である。藩祖が菩提寺として創建したものが、先年火災に焼け、今再建しつゝある。この寺の地蔵像は弘法大師十六才の時の御作と伝えられている。

しかし、佐伯の美観を一層満喫するには更に舟に乗って河上に浮び海上に出ることだ。この番匠川は白魚の産地として有名だが、夏期には鮎魚あやでにぎわう。女島の干潟に出ると潮干狩に興ずることもこの町行楽の一つだ。もしも一日発動船でも備うて佐伯湾内を一巡するならば一層興の尽きないものがあるう。

僕は初めてこの町に来た時、対岸の大入島の一漁家に宿を乞うて三日間漁人生活をしたことがある。群がり襲って来る夜毎の蚤には辟易したが、昼間の楽しかったことは今でも深いなつかしさを忘れられない。風景を賞し、釣糸を垂れ、又々四周を見廻わす。一体海岸の景色は陸上から眺めてすばらしい所、海上から見てぼう然たるものの二種あるようだが、その時の印象から見ると佐伯湾

は全く後者に属する。実際佐伯湾内の風景どちらを向いても天下の絶景である。
(おわり)

独歩忌について

恒例の独歩忌が今年も六月二十三日文化会館において、佐伯独歩会主催で行われました。参加者は二十余名で盛会とは申せませんが、佐伯史談会と協力して独歩文学碑の建設をきめるなど、意義深い会でした。

記念講演は佐伯に於ける独歩研究の第一人者山内武麒先生より「佐伯時代の独歩の手紙」と題して、手紙にあらわれた独歩の人間像について、興味深いお話をうかがうことができました。

市内の各高校が、生徒の読書指導に独歩の作品をすすめて下さるなど、独歩の作品に親しむ人が、だんだん多くなっているのは嬉しいことです。

独歩会の本年度の事業として、読書会や独歩の足跡を尋ねる催しなども計画されています。(塩月)